

中世における渡来人の役割

——楠葉西忍を例に——

蔡 垂 功

はじめに

中世において、一山一寧や無学祖元のように中国からの渡来僧をはじめとして、倭寇にとらわれて日本に渡ってきた中国・朝鮮人、博多等で活躍する中国商人にみられるように、数多くの渡来人が存在していた。なかでも、代表的な遣明船貿易家として、渡来人の子である楠葉西忍の存在があげられる。

楠葉西忍については、古くは長沼賢海氏が「国際混血児」¹⁾で日本人との混血児という視点から楠葉西忍を取り上げ、その出自と享徳三年（一四五四、派遣は享徳二年）の遣明船について記している。また、田中健夫氏が「遣明船貿易家楠葉西忍とその一族」²⁾で遣明船貿易のプレイヤーの視点から楠葉西忍とその一族、および遣明船貿易家としての西忍について詳細な検討を行い、楠葉西忍に関する代表的な研究として知られる。

近年では脇田晴子氏が「物価から見た日明貿易」³⁾で楠葉西忍の記述にもとづいて、遣明船貿易での利益について検討している。さらに、森田恭二氏が「楠葉西忍と日明貿易」⁴⁾で『大乘院寺社雜事記』について再検討して、楠葉西忍の人物像や遣明船貿易の詳しい実情を明らかにしている。

本稿では先学の研究を踏まえた上で楠葉西忍が渡来人の子孫である点に注目し、その特殊性ゆえに果たし得た役割につい

て検討していきたい。具体的には、楠葉西忍の出自、遣明船貿易での役割、肥前奉行補任の三点について論を進める。

一、楠葉西忍の出自

西忍の出自については、『大乘院寺社雜事記』（以下『雜事記』と略す）に二ヶ所の記事がある。入明についての話に続けて語った康正三年（一四五七）三月十一日条と、西忍の死の二日後に四十六年の長きにわたる親交をしのんで、西忍の一族について記してある文明十八年（一四八六）二月十六日条である。

康正三年三月十一日条

天竺人子楠葉入道西忍一昨日ヨリ候了、渡唐物語以下相語、抑入道之父ハ北山大將軍之時、天竺ヨリ来テ相國寺ニアリ、於彼寺始而大將軍見參了、其後北山ニ被召置了、勝定院代他界了、名ヲハ聖云也、永享年中楠葉ハ當國立野二住宅了、安位寺大僧正立野二御座ノ時令出家、法名ヲハ西忍ト云也、コレ大僧正ノ計也、又楠葉ト云事ハ、母楠葉ノ郷ノ仁タル間楠葉ト云也、北山殿ノ時ノ名字ヲハ云天竺云々、又云、唐人藏有徳ノ者也キ、西忍渡唐ニケ度也、親子共門跡奉仕者也、

文明十八年二月十六日条

西忍入道一昨日十三日於古市令入滅云々、九十三、不便々々、嘉吉元年（西暦）歳十月より見初、至至去月廿五日四十六年也、此內在唐一年在之、天竺人ヒシリ、号唐人倉、在二条殿之御地之内、三条坊門カス丸也、彼ヒシリ之子也、勝定院殿背上意、被召籠被預一色了、父之ヒシリ入滅之後御免、父之跡ハ西忍之舍弟民部卿入道相續之了、（中略）今度入滅了、九十三歳也、

後五大院殿立野二御座之時、於御前令入道、依為天竺人之子、被付西忍了、御同年也、御弟子分也、少人之時名ムスル、俗名天次、子息長子ハ新衛門尉元次、次男四郎渡唐之時召具、三男陽禪房大定舜、（東金堂衆）息女二人在之、

(中略) 西忍之妻女元次等之母ハ、(中略) 東転経院之坊主宗信実禅房僧都之妹也、宗信ハ予同学也、(中略) 名字号楠葉事ハ、西忍之母儀楠葉之者也、八幡領云々、仍母方之名字也、(中略) 鹿園院御代自天竺来、仍毎月御恩被_レ下_レ之、相國寺之絶海國師之申沙汰也、凡希有子孫相殘了、

また、『大乘院日記目録』(以下『日記目録』と略す) 応安七年(一三七四)十二月十七日条によれば、

天竺一人来相國寺、名字聖、楠葉入道西忍之父也、將軍常召置之、

とある。

これらを整理すると、応安七年十二月、三代將軍足利義満の治世に天竺人の聖が日本に至り、絶海中津のとりなしにより相國寺で義満と会見した。おりしも同年六月、義満は僧宣聞深らを明に派遣したが、當時明は征西府の懷良親王を外交主体と考えており、加えて、今回の遣使では懷良の對抗勢力である北朝の臣下にすぎない義満から中書省を名宛人とした上に、表が備わっていないかったため、退けられた⁽⁵⁾。それゆえ、聖との会見は時宜を得たものであり、義満を大いに喜ばせたことに違いない。聖は北山第に召し置かれ、毎月扶持を受け、二条殿の敷地内である三条坊門烏丸に住まいした。聖は名を天竺といい、唐人倉と号した。義持の治世になると、明と断交するなどして、ことごとく父義満の外交姿勢に反発していた立場からすれば、聖は看過できない存在であり、結果として西忍とともに一色氏に預け置かれた。聖は義持の治世に死去し、それに伴い西忍は赦されて大和国立野に下り、西忍の弟である民部卿入道が聖の後を継いだ。

聖の出自や絶海中津との関係については、何ら史料が残されていない。天竺人という点から、田中氏は先学の説からジャワ人やアラビア人等を挙げた上で、天竺、唐人のいずれの点からも不特定の外国を指していると考えた方が自然であるとしている⁽⁶⁾。また、関周一氏は一五世紀には「異国」の一般人に対する呼称が「唐人」の語に収斂される端緒が見られるとし、『雑事記』文明十八年二月十五日条から、「天竺人」であっても「唐人倉」と号する意識があったとしている⁽⁷⁾。以上から、「天竺」人でありながら「唐人」倉と称される点、さらに異国人の呼称が唐人に収斂される点から、天竺と唐人の共通項と

して、中国以外の外国人と考えてよいのではないか。

唐人倉（「唐人」「倉」という号、有徳の者といわれるところから、聖は金融業者である土倉を管み、中国と何らかの関連をもつ商売を行っていた豪商と考えられている。また、聖が義満と会見する前年の応安六年（一三七三）六月に明の太祖の使者として来日した仲猶祖蘭の船に随行したともいわれる。いずれにしても、貿易等を含めて中国と深い関係にあったことは間違いないといえる。一方、絶海中津は十余年にわたって中国にあり、多くの文人と交わり、漢詩に長じているところから、漢語について高度な能力を有することは想像に難くなく、聖とも共通言語である漢語でやりとりしたと考えれば、聖をめぐって、とりたてて言語に関する問題が取り上げられていない点も理解できよう。

一方、本稿の主人公である西忍は聖の来朝から二十一年目の応永二年（一三九五）に生まれている。幼名をムスルといい、俗名を天次といった。経覚が立野にあった時に出家し、天竺人の子というところから法名を西忍とつけられた。経覚とは同年であり、その弟子分となった。楠葉という姓は、母が楠葉の者であるためで、母方の名字である。西忍の妻は宗信の妹であり、宗信は『雑事記』の筆者である尋尊の同学であった。西忍は三男二女をもうけており、それぞれの活躍については、田中氏の研究に詳しい⁽¹⁰⁾。また、聖と西忍はいずれも大乘院の奉仕者であった。

河内国交野郡楠葉は淀川沿岸にあつて交通の要衝であり、楠葉関は鎌倉以来「年来南都ノ管領ノ地」とされ、暦応三年（一二四〇）には院宣により河内国楠葉関所を春日杜造管料所に充てられた。また、楠葉における関銭収益として、文明年間（一四六九―八七）興福寺大乘院門跡領として「楠葉関千百貫」という記事があつた⁽¹¹⁾。さらに、『雑事記』文明十八年二月十六日条にあるように、石清水八幡宮領でもあつた。

経覚は足利義教の怒りを買って立野に放逐され、西忍は足利義持の外交方針に背いて聖とともに一色家に預けられたうえで聖の死後立野に下った。そこで西忍はかつて興福寺別当であつた経覚の手により出家した。また、尋尊は十一歳のころから西忍と知り合い、さらには西忍の妻は尋尊の同学の妹にあたる。加えて、西忍ゆかりの地であり、西忍の母の出身地でも

ある楠葉は、大乘院門跡領であつた。いずれの点から考えても、興福寺あるいは大乘院と西忍とのつながりは、仏縁の深さを感じざるを得ない。

また、「在唐一年」は、西忍の二度にわたる入明を意味しており、純粹な明での滞在期間を示している。具体的には第一回が永享五年（一四三二）春～六月、第二回が享徳二年（一四五三）四月～三年二月である。遣明船貿易については次章で述べる。

二、楠葉西忍と遣明船貿易

遣明船貿易について、『雜事記』あるいは『日記目録』では大きく分けて二通りの記事がある。一つは遣明船の往來に関する事実そのものを記したもので、一つは西忍の回想による遣明船の構成や貿易品による利益などについて述べたものである。

西忍の第二回入明にあたる享徳二年（一四五三）年の遣明船をめぐる、『雜事記』（①）及び『日記目録』（②）の享徳二年三月晦日条では、

渡唐船九艘出日本地云々、西忍之説後段記之、（①）

渡唐船九艘出日本、長谷寺・多武峯天龍寺等申請云々、同九月一艘、合九艘也云々、（②）

として、遣明船の出発について述べている。なお、『雜事記』の記事は後に加筆（追筆）されたものであり、後段は同年の末尾に遣明船の積み荷の数量について西忍の語ったものを指している。

唐船十艘二積色々、西忍入道説分後日記之、

油黄三十九万七千五百斤、加進物一万斤定、此西忍所定日

銅十五万四千五百斤 寶黄十万六千斤

太刀九千五百振、加進物定 長刀四百十七振 ヤリ五十一

扇千二百五十本 蒔絵物大小六百卅四色

此内

一号船四万三千八百斤 三万四千二百斤

二号船七万七百斤 四千二百斤^半

三
号
船
二
万
七
千
百
斤

一
万
四
千
四
百
斤

四号船三万四千四百斤
二万二千^半百斤

五号船大内申請不渡之、

六号船九万二百斤 一万五千四百斤

七号船五万三千二百斤

八号船四万四千二百斤 三万二千斤

九号船二万三千百斤 二千四百斤^力口^ア月渡之、

十号船一万一千斤
一万三斤

つまり、享徳二年の遣明船では、当初十隻が派遣される予定であつたが、一隻が勘合の都合により参加できず、実際には九隻が派遣された。その積み荷には硫黄三十九万七千五百斤、銅十五万四千五百斤、蘇芳十万六千斤をはじめ、太刀、長刀、槍、扇、蒔絵物といった武器や工芸品があり、それぞれの船の硫黄と銅の積み込み量の内訳が具体的に示されている。

また、『日記目録』享徳三年十月十三日条では、

唐船歸朝、宣德錢到來、

として、遣明船の帰国と、明銭（宣徳銭）がもたらされたことが記されている。

ついで、西忍の遣明船貿易をめぐる回想について記したい。

長祿三年十二月十四日条

楠葉入道物語、去永享三年四唐舟御入数事、

一 号 船 室 阿 殿、
 二 号 船 相 国 寺、
 三 号 船 山 名、
 四 号 船 三 宝 院
 同 讚 州 一 色 畠 山 武 衛
 聖 護 院 大 乘 院 青 蓮 院 三 条 細 川
 赤 松 善 法 寺 田 中

五号船三十三間堂、

同六年唐舟御入数事、

一、二、三、四、五、六号舟

享德元年唐舟、

一号舟天龍寺、二号舟伊勢法樂寺、三号舟天龍寺、四号舟正福寺、六号舟大ツモ、七号舟大内、八号舟多武峯、九号舟法樂寺、十号舟天龍寺、

五号舟嶋津 申出、勘合不渡之云々、

永享三年（一四三一）、派遣は永享四年（一四四二）の遣明船では、一号船は幕府、二号船は相国寺、三号船は山名氏、四号船は三宝院、聖護院、大乘院、青蓮院、三条氏、細川氏、讃州細川氏、一色氏、畠山氏、武衛（斯波氏）、赤松氏、石清水社家善法寺家、同田中家、五号船は三十三間堂が船主となっている。永享六年（一四三四）の遣明船では、一号船は幕府、二号船は相国寺、四号船は山名氏、五号及び六号船は三十三間堂が船主となっている。

享徳元年（一四五二、派遣は同二年）の遣明船では、一号、三号及び十号船は天龍寺、二号及び九号船は伊勢法樂社、四号船は正福寺、六号船は大ツモ、七号船は大内氏、八号船は多武峯及び長谷寺が船主となっている。五号船は島津氏を船主として入明する予定であったが、勘合が渡らずにかなわなかった。

そのうち、西忍が参加したのは、足利義教の第一回にあたる永享四年（一四三二）と、足利義政の第一回にあたる享徳二年（一四五三）であり、多武峯と長谷寺は興福寺の末寺にあたる。なお、この記事の書かれた長祿三年（一四五九）十二月は、次章で述べる肥前奉行の補任から十ヶ月経過した時点にあたり、遣明船の個別の記事については前述の享徳二年条で述べているが、遣明船の概要について述べたのは初めてであり、職務に関連して語ったもののなか、あるいは純粋にみずからの経験について述べたもののかは明らかでないが、自らが参加していない永享六年（一四三四）遣明船の構成についても言及している点から考えて、奉行職と何らかの関連があるといえる。そして、この記事が遣明船の構成や貿易品等といった遣明船貿易について語ったきっかけとなったものである。

文明五年（一四七三）六月十七日条

渡唐船巡風様、天竺人西忍人道説者、兩度渡唐之間、巨細存知云々、日本国ヨリ大唐国ハ相当未申方、

四明之州事不事知也
長祿三年

春ハ肥前国大嶋小豆浦ヨリ船_二出_レ之、五十里南也、

秋ハ同国後唐ノ嶋ヨリ船_二出_レ之、五十里北也、其故ハ、自八月至二月マテハ北風□、自三月至七月マテハ南風

也、秋風ヲハ、野分トモカリワタシトモ云也、

此マセ南ニ成事在之、又左マワリトテ辰巳ニ成事在之、其時ハ高麗嶋ニ付事在之云々

帰朝ハ、五月以後以申酉ノ風_二出_レ船也、此風ヲハマセト云也、

春ノ帰朝ハ大ニ不可_レ然云々、可_レ嫌_レ之、風北ヨリ吹故也、

大唐南京_今京都、北京_今帝都、南北ノ間三千四百里、六丁一里也、仍日本道五百里也、

日本船ノ津明州ヨリ、北京ノ帝都マテハ、日本道三百五十里也、仍南京都ハ、自明州相当南方テ百五十里南也、

(中略)

鹿藺院殿依御計略_二テ、勘合ヲ被_レ乞請_一、以_二勘合_一渡_レ之ナリ、無_レ勘合_一者可_レ殺害_二云々、盗人故也云々、永享二百枚、宝徳二百枚給_二勘合_一云々、此勘合ヲ船一艘宛ニ持_レ之テ、其船中人数ヲ書付也、外官何人、仁凡何人ト書_レ之、

一号般_⑧・二号船・三号船ト書_レ之、一号船ハ惣船ノ頭也、永享ニ自_二当門跡_一被_レ渡下_二北面快弘索信房_一、シハ八号船也、

十三人ノ寄合船也、三宝院・聖護院・大乘院・善法寺・三条殿・青蓮院・田中・武衛・畠山・讃州・細川・一色・

_{子孫}赤松

船方各百貫宛出_レ之、船三百貫、三百貫修理船道具分、船人四十人四百貫、合_⑨十貫、通事_⑩糧米等三百文、猶以不足

之間、重而各被_レ出_レ之、通事二人、二百六十貫、自余船、二百六十貫云々

前段では日本から明までの行程について詳細に記されている。すなわち、明は日本から南西にあたり、遣明船は春は肥前国大嶋小豆浦から船出して五十里南下し、秋は同国五島から船出して五十里北上する。これは、八月二月は北風が、三月七月は南風が吹くためであり、五月以降に「マセ」という西南西の風に乗って帰国する。また、明の国内の行程が示されており、同じ単位を用いながらも日本と明の距離の差異が明らかになっている。加えて、『日記目録』後付では、この前段にあ

るような日本から明までの行程と距離を示した上で、その略図が書かれており、まだ見ぬ中国に対する関心の高さがうかがえる。

後段では、勘合について取り上げている。すなわち、義満の計略によって勘合を受けたため、勘合を所持して渡航することとなった。勘合を所持せずに渡った場合、盗人（海賊）として殺害された。また、永享四年遣明船帰朝の際に宣徳勘合百通を、享徳二年遣明船の帰朝の際に景泰勘合百通をもたらししたように、皇帝の代替わりごとに新たに勘合百通を受け取ったとして、日本への勘合の来歴を述べている。続いて、勘合の書式について、一隻ごとにその人数が記され、外官何人、人凡何人のように書かれた。大乗院からは北面衆の宗信房快弘が外官となり、西忍は人凡として乗り込んだ。なお、「八号船」というのは、『満濟准后日記』永享四年六月三日条に

唐船事、大略今日治定了、寄合（船名）船事、（後略）

とあるように、船名について言及したものである。また、寄合船の費用について、各船が百貫を負担し、合計千三百貫とする。内訳は船賃三百貫、修理費三百貫、船員四十人分四百貫、通事の食費等三百貫とし、不足分については各船が負担するとしている。

また、『雑事記』には、貿易品の利益について詳細に書かれており、最も特徴的である。以下にその例を示す。

文明十二年（一四八〇）十二月廿一日条

楠葉入道当年八十六歳也、兩度乗唐船者也、今日相語之、唐船之理（利）ハ不可レ過レ生糸也、唐糸一斤二百五十目也、日本代五貫文也、於西国備前・備中一駄代十貫文也、於唐土明州・雲州糸二替之者、四十貫五十貫二成者也云々、又金一棹十兩八十貫文也、成糸者百二十貫或百五十貫二成也、スワウ日本一斤五十文或百文、唐土一貫五百文分にて七百五十文二成、七百五十文ハ紙銭サウ也一枚五文計者也云々、

ここでは「唐船之理ハ不可過生糸也」に象徴されるように、生糸が遣明船貿易でもっとも利益をあげる商品であることを

明言している。具体例として、生糸一斤二百五十目が日本では五貫となり、備前・備中の十貫文する銅一駄を明州・雲州で生糸に換えると四十〜五十貫と四〜五倍となる。また、金一棹十兩は三十貫文であるが、これを生糸にすると百二十〜百五十貫となり、やはり四〜五倍の利益をあげる。さらに、蘇芳が日本では一斤五十〜百文であるが、明では一貫五百文分が七百五十文になるとして、生糸及び蘇芳がどれだけの利益をもたらすかを詳細な数字をあげて説明している。また、買い上げ価格が安価な場合、支払いの一部には額面五文の紙幣（宝鈔）が用いられたことがわかる。

文明十五年（一四八三）正月廿四日条

昨日楠葉入道来、色々物語、永享五年唐船ハ六艘也、（中略）

此内四号船十三人者（中略）

一人別外官一人・従二人 合三十九人

此外官并従ニハ有徳之商人ヲ成力秘事也、十分一ヲ取故也、一万貫ニハ千貫取レ之者也、日本到来物二代物ヲ付テ其分一ヲ取也、計会仁ハ不_レ可_レ叶事也、能々可_レ覚悟_{（覚悟）}事也云々、（中略）

仮令外官方二十四人・船頭方二十五人計・商人方三十人計、此外商人方可_二相計_一者也、次於_{（於）}唐土又申合可_二成敗_一事在_レ之、王城へ可_レ上分ハ於_{（於）}唐土定_レ之、人数イカホトノ分ヲ王城へ可_レ上之由被_{（所）}仰出テ後定事也、此事大事也、外官事ハ無_{（無）}是非、商人ニハキカニモ物ヲヲ、ク持タル大商人ヲ王城へハ可_レ入事也、是又第一秘事也、さ様ニアリテコソ十分一二徳分ハアル事也云々、

就中唐土エ可_レ持物ハ、仮令百貫足ニテ八十色ニ物ヲ可_レ持也、其時節々々ニテ不_レ定故也、一物ニテ十倍・廿倍ニ成事モ在_レ之、一物ハ一向ニ不_レ立_{（立）}用シテアル物もアリ、能々可_レ覚悟_{（覚悟）}事也云々、（中略）

ランコ皮唐土ニテハ冬人物也、コ少 太刀 長太刀 ヤリ 銚子鋌 赤金 金 スワウ 吉扇

大綱如_レ此者共也、又自_{（自）}唐土相計テ可_二持来_一物事、

る。

もう一つの特徴として、西忍が享徳二年（一四五三）の遣明船について記した渡唐船入目日記に関して、詳細に記録されていることである。内容は文明十七年（一四八五）八月三日条と同年七月日条の二日に分けて記されており、これらの記事によつて遣明船に要する費用と明側の遣明使に対する待遇についての概要が把握できる。なお、この記録は尋尊により筆録され、『雑事記』とは独立した『唐船日記』として国立公文書館内閣文庫に所蔵されている。

文明十七年八月三日条

西忍入道歳九十、一昨日渡唐船入目日記持来、

宝徳度、

十貫文安芸国高崎エ船借用二下向粮物

三百貫船賃

三百貫船作事

四百貫船方四十人別十貫、

五十貫船トウ・カチトリ

四百貫ユワウ五万斤此内三百貫ハユワウ、
百貫ハ船シテ

百貫四月ヨリ八月マテ毎月十五貫ツ、船方御丁間水、人別百人分船方マテ

百貫渡粮米百石、人百人分船方マテ

百貫スミ・木・油・水榼・糯・ラウソク・茶・色々事・ミソ・シホ

六十貫通事二人給分

合千八百二十貫此内四百貫文ユワウ方ハ善広院殿
御代ハ不可入、近年推察故二人云々

都王宮、毎度之下物注文

毎日米一升良米、酒瓶半

麦コ

焼餅四

茶子ノ果子

シホ

ミソ

クキ

カウノ物

ス

カ

ニハトリ ヤキ

生力

サン小

薪

スミ

五ヶ日二一度二毎日ノ分下行之、（中略）

衣装日記十一月十二日二給之、

進ス フス 従僧 コサ 以上僧ノ衣装三ツ

外官ニハ口ノ金織タル三ツ、

人凡ニハ北絹衣装三ツ、又冬衣装一ツ、
今年初也云々、外官ニハ不給之、

帰朝ニ引出物

進ス・外官以下二人別北絹四反・ロー一反・沙一反・シユス一反、

以上七反ツ、進ス錢十貫、コサ・外官ニ八貫ツ、

人凡ニハ北絹一反・木綿一反、三百五十人計也、

享徳二年の遣明船では、安芸国高崎から船の借り賃として十貫文以外は、船賃、工事費、船員の人件費については永享四年遣明船とは同額であり、他に船頭や舵取への給金、硫黄、往路の水、食料や調味料等の必需品、通事二人への給金として総額千八百二十貫文が必要であった。ついで、都で毎日くだされた配布品について記している。白米をはじめ肉類、酒、茶菓、調味料、燃料であり、五日ごとに配付された。また、衣装についても従僧、居座、外官、人凡に対して身分ごとに配布された。さらに、帰国の際には引出物として北絹等の布地や明銭が身分ごとに下された。

文明十七年八月七日条

西忍来、先日進上渡唐相殘記持来、明州ニシホウフ、外官一人前ノ記、下行物毎日常下行分也、

柴四百五十斤斤別百六十文目、十六兩也、
七十兩文三兩也

炭百五十斤サシ二十四貫目、花桧十五兩二兩別十文、茶廿五兩二百五十目、塩三斤十二兩六百目、

欄子百五十丁ラシ 酒一瓶茶七斤計人ホトノ蓋也、油三斤十二兩六百目、魚一斤半二百四十目、

菜三斤四百八十目、白米五升六合余七合計器也、日本、以上外官方

人凡ニハ黒米二升宛

假令宝徳度渡唐ニ多武峯・長谷寺ヨリ船一艘沙汰立之時ニ外官三人^{コホ中ニ唐使館長官、通事、書記}也、此下ニ商人以下百人分、人凡ニテ召具之、百人ハ外官三人之下人分也、一人ノ下ニ三十人余也、此分ヲ毎日外官人下行動ニテ事ヲ成也、余分ハ外官徳分也、外官一人ノ下ニ人ノスクナキハ外官ノ徳分也也、^(所也)米ハ人別ニ被^レ下行^レ之、何十日ナリ共、明州ニ在国中ハ、毎日此分下行也、船方四十人計在^レ之、明州河ハタニ木屋ヲ造テ候ニ、船方ヘ下行動又^レ在^レ之、数百人船人也、西忍之船分四十人船方也、毎日下行動物色々在^レ之云々、凡希代善政国也、

後半は、外官に対して下された物品の一覧である。主食である白米や燃料、調味料、嗜好品が毎日配布され、外官の下にいった商人である人凡に対しても黒米（玄米か）以外はおおむね同じ物が配られた。船員については明州の河岸に木造建築が建てられてそこに住まわされ、外官や人凡と同様に食料等の必需品が配布された。以上のような対応に対して、明を「希代善政国」と称賛している。

朝貢とは明を宗主国とし、他の国々を藩属させるというものであり、あくまでも明と外国が主従関係を形成することが主目的であり、貿易についても、諸外国の進貢物に対して明の朝廷が行う賞賜物の反対給付が基本であり、明での滞在費、運搬費は明が負担し、関税も免除された。加えて、『唐船日記』の記事にみられるように、遣明船の使節の下々に至るまで衣食住が十分に担保されており、日本一国に対してさえ数百人分の経費を要することを考えれば、「希代善政国」は明にとって体面維持のための必要経費であつたと考えてよい。

これら以外にも、永正二年（一五〇五）四月四日条には、前段に文明五年六月十七日条を参照したと思われる日本から明までの詳細な距離が、後段に文明十二年十二月廿一日条を参照したと思われる生糸の価格の地域差について記している。前述のように、西忍は文明十八年二月十四日に死亡しており、もはやこの世にない。この年は西忍の二十回忌にあたるが、それにちなんだものなのか、あるいはたまたま書かれたものなのか、その経緯は明らかでないが、西忍に関してよほど強烈な

記憶が、尋尊をして書かしたと言っても過言ではないだろう。

『雑事記』の西忍に関する記事をまとめてみると、遣明船の構成と随員の役割、貿易品をめぐる利益、明までの行程という三点に集約できる。また、「希代善政国」との表現があるように、尋尊が西忍の話を聞くにつれて中国ならびに遣明船貿易に対して並々ならぬ興味関心を抱き、それと西忍の遣明船貿易についての深い経験と経済知識がいまって記事の大部を占めるに至ったといえよう。

三、楠葉西忍の肥前奉行補任

西忍は長祿三年（一四五九）二月、幕府より肥前奉行に補された。『雑事記』長祿三年一月廿八日条には、

為唐船自公方楠葉入道ヲ被召之由、與一物語之、

として、將軍足利義政から遣明船をめぐってのお召しがあったことが西忍の長子與一（元次）から語られており、奉行補任についての内示があったことがうかがえる。また、奉行補任については、『雑事記』（①）及び『経覚私秘鈔』（②）の同年二月廿一日条で

楠葉入道為肥前奉行被召上、唐船事云々、（①）

□^楠葉入道京上云々、為唐船罷上^{（唐忍）}欽由風聞者也、（②）

として、遣明船に関連して上洛を命ぜられたことが記されている。

ただ、田中氏や森田氏のいうように、肥前奉行の職務については明らかでない^{（14）}。また、室町幕府の職制を見る限り、中央、地方にかかわらず肥前奉行という職名は見当たらず、遣明船に関連すると思われる職名として唐船奉行が存在する^{（15）}。では、なぜ幕府はあえて西忍を職制にもない肥前奉行に補任したのか。その職務や必要性等について、いくつかの点から考えてみたい。

はじめに、経済面から考えたい。経済面では、室町幕府の財政基盤と遣明船貿易による収益という密接な関連を持つ二点に起因している。

室町幕府は有力守護大名の連合政権的な性格をもつため、必然的に幕府の財政基盤も脆弱であった。具体的な財源として、御料所からの年貢や公事、段銭、棟別銭、津料、関銭、倉役・酒屋役、幕府のもとで金融活動を営む五山禅院からの献銭と並んで、遣明船貿易における収入や抽分銭があげられる。すなわち、明の皇帝から日本国王に対する回賜物や貿易品の収益の十分の一にあたる抽分銭も幕府の大きな財源であった。

ところが、足利義政の第一回の遣使であり、西忍の二度目の渡航である享徳二年（一四五三）の遣明船で大きな転機を迎えることになる。同年の遣明船での貿易品の価格について、『明史日本伝』景泰四年条の記事では、

景泰四年入貢、至臨清、掠居民貨。有指揮往詰、毆幾死。所司請執治、帝恐失遠人心、不許。先是、永樂初、詔日本十年一貢、人止二百、船止二艘、不得携軍器、違者以寇論。乃賜以二舟、為入貢用、後悉不如制。

宣徳初、申定要約、人毋過三百、舟毋過三艘、而倭人貪利、貢物外所携私物增十倍、例當給直。礼官言：

「宣徳間所貢硫黃、蘇木、刀扇、漆器之属、估時直給錢鈔、或折支布帛、為數無多、然已大獲利。今若旧制、当給錢二十一萬七千、銀価如之。宜大減其直、給銀三萬四千七百有奇。」從之。使臣不悅、請如旧制。詔增錢萬、猶以爲少、求増賜物。詔增布帛千五百、終快快去。

とある。すなわち、景泰四年（一四五三）の入貢で、臨清で遣明使の随員が略奪を行ったため、官員を派遣したが、かえって殴打され、数人が死亡した。この暴行に対して処罰を求めたが、景泰帝は人心が離れるのを恐れて許可しなかった。洪武帝の初期に日本に対して十年に一度入貢し、その際の人数は二百人まで、船は二隻までとし、兵器の携帯を禁じるという制限が加えられ、違反したものは寇（海賊）とみなされた。また、入貢のために船二隻を賜わったが、その後は制限が守られなかった。

宣徳帝の初期に約定が定められ、人数は三百を過ぎることなく、船は三隻を過ぎることのないように制限が加えられた。倭人は貪欲なため、進貢物以外に私貿易品を前回の十倍も持参した。礼部の官員は「宣徳年間の貢物である硫黄、蘇木、刀扇、漆器は数が多くなかった。今回も旧制にしたがつて買い上げれば金額が膨大であるため、大幅に減額した。」としたが、遣明使はこれを悦ばず、旧制による買い上げを求めた。詔勅により増額されたが、なおも少ないとして賜物の増加を求め、詔勅により布帛が増加された。

前述のとおり、朝貢貿易とは、諸外国の進貢物に対して明の朝廷が賞賜物を反対給付するものであり、貿易は朝貢の恩恵として副次的に認められたため、買い上げ価格は明側が一方的な決定によるべき性質のものである。そのような禁忌を破ってまでも遣明使があえて執拗ともいえる増価交渉を行ったという点からも、遣明船貿易における利益の莫大さが共通認識として存在していたことがうかがえる。

莫大な利益の具体例として、景泰帝からの回賜物としては、日本国王（足利義政）に対しては銀二百両、絨綿（色糸を用い紋様を織り出した絹織物）四匹、紵糸（練糸で作られた地が厚く光沢のある絹織物）二十一匹、彩絹（美しい紋様が織り込まれた絹）二十四匹、紗（目が粗く薄く透き通った軽い絹織物）十九匹、羅（網目状の透けた薄い絹織物）二十匹が、王妃（日野富子）に対しては銀百両、絨綿二匹、紵糸十一匹、彩絹七匹、紗八匹、羅八匹が贈られており、⁽¹⁶⁾ 将軍家にとっても大きな財源だったことが理解できる。

朝貢貿易において、外国からの進貢物を薄く、明からの回賜物を厚くするという「厚往薄来」が原則であったが、正統帝がオイラートの捕虜となった土木の変（一四四九年）以降に軍事費が国家財政を圧迫し、朝貢貿易でも買い上げ価格の切り下げをはじめとする経費節減を余儀なくされた。それが宣徳要約となって現われ、幕府としても新たな対応が不可欠となった。

次に、職制に注目したい。一般に、室町幕府における奉行という職名は、中央においては評定衆配下の恩賞奉行や興福寺

奉行、政所執事配下の普請奉行や段銭奉行、問注所執事配下の越訴奉行、侍所所司配下の地方頭人（地奉行）など数多く存在する一方、地方においては問注所執事配下の越訴奉行、政所執事配下の鶴岡総奉行や箱根奉行等（いずれも鎌倉府）に見られるのみであり、地方官の最上位は守護である。すなわち、特定の国名を冠した奉行はおおむね存在しないといえる。

また、肥前奉行という職名について考えれば、その職務は肥前国に関する事項に限定されるものであり、仮に肥前奉行の職位をもって遣明船に関する事項を取り扱ふとすれば、唐船奉行に対して越権行為となる。いずれにしても、肥前奉行としては幕府が期待した職責を果たし得ないことになる。では、どう考えればよいのか。

幕府としては、二度にわたる入明での豊富な貿易経験、特に永享二年の遣明船貿易に見られるような買い上げ価格の急激な切り下げに対応できるような経済知識を持つ西忍に遣明船貿易に関して責任ある職務を担当させようと考えた。しかし、遣明船貿易を担当する唐船奉行はすでに補されており、加えて西忍は大乘院の学侶にすぎなかった。そこで、職制の枠外にあり、令外官のような性格を持つ肥前奉行を新設して西忍を補任し、抽分銭の確保を図ろうとしたのではないか。

これらはあくまでも推測の域を出ないが、以上のように考えておおむね妥当であろうと考えている。

おわりに

楠葉西忍という人物は渡来人の子として生まれ、数奇な運命をたどりながら遣明船の一員として二度にわたって入明し、貿易面でその豊富な才能を遺憾なく發揮し、ついには肥前奉行として幕府の立場から遣明船貿易の実務になうまでになった。これはとりもなおさず「有徳之商人」として遣明船貿易に関して細大漏らさず熟知していた西忍の才能そのものが注目され、評価された結果である。

西忍のほかにも、中世の渡来人には明州鄞県塩倉橋の出身で、博多聖福寺から天龍寺にうつり、西忍の第一回の入明である永享四年（一四三二）遣明船の正使となった龍室道淵や、倭寇に捕らえられ、日本・中国・朝鮮の間を転々とし、義満の

寵愛を受けて通事を務めた中国人魏天⁽¹⁷⁾にみられるように、各自の能力を活かして適材適所に配置された観がある。

これには、今日のように十分な能力を有しながらも、国籍によつて有為な人材が排除されるという素地がまったく感じられず、むしろ渡来人であるがゆえの特殊な能力——語学力や商才などを重視して積極的に登用するという手法は、まさしく国家や民族のレベルを超えたマージナルな時代を反映したものといえよう。

注

- (1) 長沼賢海「国際混血児」(『史淵』五六輯)七七頁以下
- (2) 田中健夫「遣明船貿易家楠葉西忍とその一族」(同『中世海外外交史の研究』東京大学出版会 一九五九年)
- (3) 脇田晴子「物価より見た日明貿易の性格」(『日本史における国家と社会 宮川秀一先生古稀記念出版』思文閣出版 一九九二年)二五九―二六五頁。
- (4) 森田恭二「楠葉西忍と日明貿易」(同『大乘院寺社雑事記の研究』和泉書院 一九九七年)
- (5) 『明史日本伝』洪武七年七月条、『明実録』洪武七年六月乙未条。
- (6) 前掲(2)一一七―一九九頁。
- (7) 関周一「中世後期における「唐人」をめぐる意識」(田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館 一九九五年)六四―六六頁。
- (8) 前掲(2)一一九―一二〇頁。
- (9) 『枚方市史 第二巻』(一九七二年)五〇〇頁。
- (10) 前掲(2)一二五―一三〇頁。
- (11) 前掲(9)四九六―四九七頁。
- (12) 木宮泰彦『日華文化交流史』(富山房 一九五五年)五五〇―五五一頁の表による。
- (13) 『看聞御記』永享八年七月十三日条。
- (14) 前掲(2)一四五―一四六頁、前掲(4)二六三―二六四頁。
- (15) 『改訂増補 日本史辞典』(京都大学文学部国史研究室編 東京創元社 一九八〇年)五六四―五六五頁参照。
- (16) 『善隣国宝記』巻下 明景泰帝別幅。
- (17) 前掲(7)六七頁。

(一九九七年三月国際文化専攻修了)